
啼かない鳥とはいうけれど

雪深 榎乃

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

啼かない鳥とはいうけれど

【Nコード】

N2600W

【作者名】

雪深 権乃

【あらすじ】

以前からやりたかった長編連載、その開始の第一回です。 田舎から上京して来た少年と、廃屋の様な下宿屋に住む男との共同生活。その顛末を静かに書いて行けたらと思っています。

―其ノ壱―

僕が生まれ育った場所は、本当に刺激とは無縁の場所だ。

幼稚園の頃に出会った友達は、高校まで互いの成長を見届け、本屋のオヤジは僕達全ての嗜好を把握している。

大声を上げれば、帰宅後に母親から奇行を咎められ、生まれる前に他界した祖父の話を十数年に渡り繰り返し唱えて来る。

漫画の様な特別な事も、突飛なしきたりもある訳でなく、何となく嫌な思いを抱いたまま、まるで町を覆う蓋の様な、北国特有の鉛色の空を見上げて生きて行く。

先人、諸先輩の英断をなぞり、進学という誰もが納得する手段で逃げる事に多くの人間が挑戦するも、その程度の努力すら出来ずに地元で就職をする中、僕に出来る最大限の事をして、ようやく蓋の隙間から外の世界に這い出る事に成功した。

そつだ。

僕はこの春から東京の大学で、自由と変化を、選択する権利を勝ち取った。

死んだ目をした同級生とは違う。

そのまま蒸されて死んでしまえ。

……なんて事を、僕は今、見知らぬ路地で夕暮れの空を眺めながら妄想している。

いや、もしかしたら実際に口に出しているのかも知れない。

そんな区別も出来ない位、心身共に疲弊していた。

四月からの進学に際し、意気揚々とアパート探しに上京した僕は、大学が勧める物件を中心に色々と見学した。

最初に考えていた条件はどうやら予算の三倍はかかる事が午前中に分かり、妥協妥協と呪文の様に頭の中で唱えながら、六畳ワンルームのユニットバスがお前にはお似合いだぜと罵倒された（と自分

で思う程の衝撃だった）頃には随分と不動産屋の車に揺られていた。条件の再検討と、予算の増額は可能かどうかを両親に確認する必要があると、初日は契約をせずに宿に戻る事にした。

二泊三日の予定で、二日目は遊ぼうと思っていたけど、そうも言っていない。

不動産屋の車は店の前に止まり、駅までの簡単な道を僕に伝えるとそのまま解散になった。

僕はそれに従って、足を進める。

進めた筈だったのに、通算六度の行き止まりの末、住宅地に迷いこんで今に至る。

日は既に傾き始め、周辺の家々からは夕食の良い匂いが漂って来る。

余程手近な呼び鈴を鳴らして助けを求めようかと思ったが、町中で遭難したとは言える訳もなく、何よりコンクリートの塀が両脇に延々と続く様は、僕という余所者も拒絶しているようで、とても門を潜る気にはなれなかった。

だが、腹も減り気力も失せた今、せめて大きな道に出ればタクシ―を拾える筈だと最後の力を振り絞って腰を上げた。

「おう。そこ、どいてくれ。」

そんな僕の決心に、何者かがケチを付けた。

完全に不意を付かれ中腰の状態で無言で見上げる僕を、男が見下ろしていた。

丁寧に撫で付けられた黒髪在所々に白髪も少なからず見受けられる。

中年、いうよりは初老に近い風体の男。

その割にはやけに背筋が伸びていて、実際はもつと若いのかも知れない。

葬式の帰りなのか真っ黒いスーツ姿に墨色の水引がチラチラと見え

るビニール袋を手を下げながら、面倒そうに僕の反応を待っている。

「………ここ、ですか？」

今、僕が休んでいる所は、袋小路の一番奥。

周囲は塀だけで、とても用事があるような場所には思えない。

「後ろ、俺んちなんだよ。」

慌てて振り返ると、そこには僕の最初の認識通りの廃屋が建っていた。

今まで背中を預けていた鉄門は赤錆が浮き、そこから建物までの道は雑草が生い茂って僅かな光すら遮っていた。

家壁にも蔓草が張り巡らされて、どう見ても人が住んでいるとは思えない。

「ツアツアツアツ。」

そりゃそうだな。

俺だつてこんなあばら屋に住んでいるなんて言われりゃ、そんな顔するつてもんだ。」

咳を押し殺す様な笑い声。

満面の笑顔におよそ似つかわしくないそれに違和感を感じるが、そんな事よりようやく差し伸べられた手に選り好みはできない。

内心、良かったと情けない声を上げながらも、悟られないように努めて冷静に助けを求めよう。

「あ、あの………」

「悪いが、塩取って来てくれんか。」

「思いつきり出鼻を挫かれた。」

「塩、ですか？」

「いやな。」

「見ての通り、葬式の帰りなんだが、お清めの塩を玄関に置いておくのを忘れてよ。」

「台所は中に入ってすぐ右だ。」

「こっちの反応を全く無視して話は進められるのは、田舎の爺さん婆さんを思い出して、余りいい気分はしない。」

「が、同時にこの手の類は反論するだけ無駄だとも骨身に染みて分かっているし、何より恩を売ればこっちのお願いも聞いてくれる筈だ。」

「大袈裟に荷物を持つ手を上下させながら遠回しにせつつく男をこれ以上眺めているのも進展もないので、素直に従う事にした。」

「赤錆だらけの扉は、見た目より随分スムーズに開き、なるほど人の移動がある事が伺える。」

「入り口の引き戸に手をかけると、ガラガラと少し甲高い音を立てて開いた。」

「どうやら鍵もかけていなかったらしい。」

「無用心……と思いかけた所で、こんな廃屋には無用だろうと、妙に納得してしまった。」

「中を見て一瞬呆然としてしまった。」

「家の外見とかけ離れて、整頓された玄関。」

「一人暮らしの家には似つかわしくない程に広いそこは、靴が十足は並べられそうな余裕があり、郷里の公民館を連想させた。」

「大部分が茂みに隠れているから分からなかったが、一般の民家ではないようだ。」

「施設、とまでは行かないが、十人規模の人間が暮らす規模の建物だと思う。」

その割には人がいる気配もなく、立派な玄関に反して靴が一足も出ていない事に違和感を覚えるも、見ず知らずの他人の家に上がり込む居心地の悪さが直ぐ様上塗りされた。

靴を乱暴に脱ぎ、素足のまま廊下を進む。

板張りの廊下も目立った埃もなく、毎日掃除されているのが分かる。

男に言われた通りにすぐ手前にビーズの暖簾がぶら下がった入り口があった。

ジャラジャラと甲高い音を立てて中に入ると、そこもまた無駄に広い台所だった。

六人程度はゆづに使える大きな長方形のテーブルが中心に設えられ、壁には天井近くまである食器棚がいくつも据えてある。

ピカピカに磨かれた流しの脇に、調味料が並べられた盆があるのを見付けると、その中から塩の瓶を摘み上げた。

流石にこのまま持つて行って男に振りかけるのもおかしいと思い、小皿でもと食器棚を覗く。

中にはビッシリと皿や鉢が積まれ、それらもまたいつでも取り出して使える状態になっていた。

その中から無難な白い醤油皿を見付け、そこに塩を適当に移すと、足早に男の元へと戻った。

「おお、悪いな。」

迷わなかったかい？つて、どこのお屋敷かってな。」

外に出ると、男は変わらぬ笑顔で出迎えた。

目尻に深い皺を刻ませて笑う彼の顔は、頬の瘦けを過度に目立たせ、何とというか生気が足りない印象を与える。

殺しても死なない程生き生きした郷里の年寄りと比較するのもおかしな事なのかもしれないけど。

僕が塩の乗った皿を渡すと、両手で受け取り一滴み自分にかけた。

妙に生白い手は、皿と塩の白さと一体化する位だが、夕暮れの暗さでそう見えるだけだろう。

「おし、これで家に入れる。

ありがとうな。」

「いえ……」

「ところで兄ちゃん、こんな所で何してたんだ？」

残りの塩を路地の隅に投げ捨てながら、男は僕が一番欲していた言葉を投げかけた。

まっつてましたとばかりに、流れるようにこれまでの経緯を話した。春からの進学のためにアパートを探しに来た事、それが難航した拳げ句に土地勘のない場所に放り出された事、さまよい歩いた先にこの袋小路に至って途方に暮れていた事。

恥を忍んで、ではないが、詰まらない見栄で千載一遇のチャンスを逃す馬鹿は流石にしない。

「ッアツアツアツ。」

そりゃ散々な目に逢ったなあ。

今ハイヤーを呼んでやるから、ちと待ってる。

駅まではそんなに距離はねえが、余分に金を握らせとけば運ちゃんも嫌な顔はせんだろ。」

余分な金………二三千円の出費は覚悟した方が良さそうだ。

「そいや、アパートの目星は付いてんのかい？」

「いえ、取りあえず行き当たりばったりで最寄り駅のこの辺を見ていたんですが、家賃が全く話にならなくて。

明日は沿線で安い所を探そうかと。」

男は、なるほどなと二三頷き、時折低く唸りながら僕を見据える。

「三万。」

「え？」

「部屋の広さは二部屋の和室ぶち抜きで十二畳。

朝夕の食事の面倒に、高熱費も定額。

門限の制約もなしで、月三万でどうだ？」

一瞬、何を言っているのか分からなかった。

どうやらアパートの提案をしているらしいが、余りに破格の条件過ぎて反応に困る。

「それって、かなり電車で揺られないといけない距離ですか？

紹介して貰えるなら、見学位はしたいですけど。」

「見学はもうしたじゃねえか。

ご覧の通り、うちは下宿屋だ。

生憎店子は人っ子一人いねえが、一応今も募集中だぜ？」

思った通り、ここは大人数が住むための場所らしい。

が、このどんなに警戒心のない人間でも分かる程の胡散臭さは、どうやっても無視出来るものじゃない。

幽霊でも出る曰く付きの物件か、はたまたそれ以上に洒落にならない何かがあるのか。

「はっ、はぁ・・・一応金を出すのは親なので、相談してからでいいですか？」

とは言え、ここで彼の機嫌を損ねるのは得策じゃないのも分かるので、曖昧に答えておく事にした。

「そうか。」

じゃあ、今電話でハイヤー呼びに行くから待ってる。
ついでに連絡先メモして来るから。

人間万事塞翁が馬、ってな。

悪い事の後にはこんな吉報もあるってもんだ。
ツアツアツアツ。」

何が楽しいのか、男は勝手に気を良くして家に入って行く。

適当に理由を付けてこっちの連絡先を教えなければ、済む話だ。

僕は無事に宿に戻る事に、すっかり安心して横の塀に寄りかか
った。

吉報は、それで十分です、おっさん。

それにしても、男のあの笑い声がやけに耳に残る。

咳をする様な、押し殺す様な、そんな声をどうしてあんなに楽し
げに出せるんだらう。

そんな事を考えながら、男が戻るまでの間、そっと目を閉じた。

「其ノ式」（前書き）

すっかり間が空きましたが、第二回をお送りします。短めですが、キリの良い所という事でよしなに。補足：名前の読みは吟介「ぎんすけ」、綾一郎「りょういちろう」です。

「其ノ式」

「おい。」

茶、淹れてくれんか？」

目の前の新聞紙が何やら要求して来ている。
何だか分からないものは無視するに限る。

「おい、吟介！」

自分の名前が耳に入って来た、気がする。
寝転がっていた革張りのソファから頭だけ上げ、長方形の紙面を
見る。

「呼びました、綾一郎さん？」

途端にガサガサと音を立てて紙の壁が取り払われ、代わりに見慣
れたおっさんの顔が現れた。

「ああ、さつきからな。」

悪いが茶を淹れてくれんか。

ポットだの急須だの、そっちの方が近い。」

白髪交じりの頭を緩慢に掻きながら、男は依然として新聞に目を
向けて話す。。

「僕はいらないので、面倒がらずに自分でどうぞ。」

「そんな可愛げのない事を言っても、本当のお前は人の頼みを断

れない心根の良い奴だと、俺はずっと前から知っているぞ。
だからほら、頼むわ。」

僕は暇潰しに眺めていた雑誌を傍らのテーブルに置く。

座椅子に胡坐をかいて新聞紙を片手に残りで適当に手刀を切る男を横目に短く溜息を吐くと、自分でも驚く程脱力した残りの体を起こして急須の蓋を開けた。

「体が重いなあ。

まだ十代なのに、それじゃ先が思いやられるぞ。」

誰のせいだ、と思うがこの人を相手に口論での勝機は皆無なのは身に染みて分かっている。

反論は主張する程度に留め、結局は要望に応じるのが常だ。

本格的に上京して、早半年が経過した。

奇妙な男からの申し出の後も幾つもの不動産屋を巡ったが、足が曲がらなくなるまで物件を見て回っても、その全てに納得が行かなかった。

一度はどこまでで妥協出来るか、とまで思っていたのに、一度最良を知ってしまうとどうにもならない。

電話で部屋探しが難航していると両親に報告する中でポロリと漏らすと、どう考えても裏があるのは見え見えな条件を手放しで歓迎するものだから、最早選択の余地は……というより、意地を張る理由がなくなってしまった。

帰省の当日に男と簡単な仮契約を交わし、両親と男とで電話で今後の流れと軽い挨拶をするまで一時間もかからなかった。

まるで現実味がないまま実家に戻り、そして四月に再び上京すると、あの日の怪しい廃屋は僕の新居になっていたという訳だ。

廃屋は下宿屋に、奇妙な男は田島綾一郎という名の大家に、迷路の様な路地は通学路に、それぞれ名前が改まると、面白い事にあれだけ躊躇した色々な要因がまるで最初からなかったかの様に受け入れられ、その置換も月を跨ぐ前にすっかり完了した気がする。

要は、住めばなんとやら。

今では居間でくつろぐはおろか、一端に悪態まで吐く有様だ。

我ながら順応性の高さに軽く引くが、寧ろ出会い方に問題があったんだ。

当時と同じ場面に置かれれば誰だって僕と同じ反応をした筈。

「そういや、今日は学校に行かないのか？」

わざと波々と淹れたお茶を慎重に啜りながら、綾一郎さんは不意に話題を振る。

「午後から2つあるだけなんで、頃合い見て出掛けて夕方には戻りますよ。」

「ったく、直行直帰は感心せんなあ。

十代の健全な男子というのは、もつと繁華街に繰り出したり悪ふざけしたりで家にいる暇なんかない筈だぞ。」

こつちとしても、隠居の様な生活を送っている彼が深夜まで遊び倒している姿が想像も出来ないが、若い頃はもつとアクティブな人間だったのだろうか。

「まあ、親御さんから大事な息子を預かっている身としては結構な事だがな。

つと、もうこんな時間だ。

んじゃ仕事に行くから、出るなら戸締り頼むな。」

やっとまともな水位にまで減ったお茶を放り出し、綾一郎さんはそそくさと居間を出て行った。

飲みもしない物を要求するな、と思いながらも流石に少し意地悪が過ぎたかと、まだ持つのも躊躇する熱さの湯呑みを引き寄せながら反省した。

玄関の引き戸の開閉音が短く響くのを最後に、家の中は急に静まり返った。

二人暮らしなのだから、他に物音がしてもそれはそれで問題だろうが、正直この束の間の孤独にはなかなか慣れないでいる。

「あの人も、それが嫌で先に出るのかな。」

良い歳して？

取り留めのない事この上ない自問自答が馬鹿らしくなり、彼が飲み残したお茶を啜った。

適温になったそれは、しんみりと胃袋に染み渡った。

―其ノ参―（前書き）

第三回をお送りします。正直、web小説で連載を自分で投稿するというのが初めてで、どの位纏めて上げたら良いのか分からない状況ですが、他の方の投稿を見るに結構細かくされていたりもするので、短くても深く考えずに上げて行こうかと思えます。自分の区切りでやっているの、ある回ではいきなり多くなったりするかも知れませんが、そこはご愛嬌という事で^^;

一其ノ参一

十月に入り、ようやく夏の熱さも一段落した。

二期期に入ったばかりの大学の構内は、授業の出方の勝手が分かり始めたせいも、新入生の数もかなり減り落ち着いた。

僕自身、毎度出る必要のない講義の判断を付け、それなりに上手くやっているつもりだが、まだ一年生という事もあって、安心してサボれるものがいまいち分からない。

部活に入っていれば、ノートの貸し借りやら先輩のアドバイスやらで効率良く遊べるのだらうと、この辺は若干妬ましく思う。

中庭のベンチに腰掛け、天を仰ぐ。

天気は良いが日差しもすっかり弱くなった。

意図的なのか丁度良い具合に日除けになっている横の木の葉も、その内業者に掃除を頼まなければならぬ位落ちるだらう。

道すがら買って来たコーヒーを口にしながら、楽しみに笑い合う学生達の姿を暇潰しに眺める。

友達というのも、切欠がないとなかなか出来ないと大学生になって知った。

高校までは人気者とまでは行かないものの、休み時間や放課後にはつるんで馬鹿話をする相手位は何人かいたが、それも教室という箱があつたればこそ。

キャンパスは驚く程に広く、誰とも関わらなくても十分学校生活を送る事が出来る。

本当に、綾一郎さんがいなければ壁とでも会話する日々を過ごしていたんじゃないかと苦笑してしまう。

「あの人も、意外と壁が友達な人だったのかもな。」

あの豪放な彼が部屋の隅でブツブツ呟いている姿を想像すると、

なかなか笑えて来る。いつもはあんなにピンと背筋を伸ばしているのに、そんな時はやっぱり丸く縮こまるのだろうか。

もしかしたら、本当に似たようなものかも知れない。

綾一郎さんは、週三回仕事に行く以外ほとんど外出をしない。

書道家という、なんとも眉唾な肩書きで近所のカルチャースクールの講師をしているなんて、詐欺師の初仕事でももう少し慎重に設定を考えるだろう。

仕事道具一つ見せて貰った事もなく、家の中にも痕跡すら見当たらない。

僕が来る前には家賃収入が一切入っていないのだから、他に仕事をしているのは本当だろうが、本当にあの人に関する情報が著しく欠如していると改めて思い知らされる。

その不足をどうしても憶測で補ってしまいが、際立つて的外れでもない筈だ。

「……なんか、本当に信じてないんだな。」

そこまで考えて、自分の思考に彼の職業を全く信じていない事に気づき、思わず笑いがこみ上げて来た。

そもそも人と関わる場所でやって行けるか疑問の残る性格なのだから、ましてや喧しさの代名詞みたいなおばちゃん連中を相手にするカルチャースクールの講師なんて務まる筈がない。

あんな、外との関係を露骨に拒絶している場所に住んでいるのだから、僕が来なかったら一体どうなっていたか。

「さて、と。」

コーヒーの缶もすっかり軽くなり、いよいよここにいる理由もなくなつた。

そろそろ綾一郎さんも帰宅している頃だろう。

寂しいおっさんをいつまでも一人にしておくのも可哀想だ。
また直行直帰か、と呆れられるだろうが、会話の糸口には丁度い
いだろう。

まったく、世話が焼ける。

―其ノ肆―（前書き）

第四回をお送りします。やっと話が進む辺り、佳境に入りましたが、話自体が地味なので多分静かに終わるかとw良い区切りがなかなかなかったので、今回は一気に大増量となりました。

一其ノ肆一

郵便受けの夕刊は、いつもの如く既に回収された後だった。

綾一郎さんが帰宅しているという合図にもなっているが、この半年ここから何か飛び出している所を見た事がない。

彼が毎日広げている新聞は、実は配達されている物ではなくどこかで一々買って来ているのかと思う程だが、ちゃんと朝刊は来るので流石にそれはなさそうだ。

と、不意にいつもの状態の筈の郵便受けから、何やら顔を覗かせているのに気付いた。 摘み出してみると、真っ白な和紙の封筒。

綾一郎さん宛のようだ。

随分と綺麗な筆書きで、書道に縁のない僕から見れば額で飾っても良いような、と少し大袈裟に思ってしまう程に繊細で女性的な文体だ。

カルチャースクールの生徒さんか誰かだろうか。

予期せぬ所で彼の肩書きを実感するとは、何だか可笑しな話だ。

ともかく、この取り忘れを山車に、今日は綾一郎さんの仕事の話 を聞くのも悪くはない。

中に入ると、案の定綾一郎さんは居間でお茶を啜りながらテーブルに新聞を広げていた。

やっぱり、郵便受けの中は確認済みらしい。

「ただいま。」

鞆を脇に放り投げ、すっかり定位置になったソファに腰掛ける。

綾一郎さんは新聞から目を離さずに、お帰り、とやる気のない返事を返した。

至っていつもの事だが、今日は何故かそれが癪に障った。

手紙を彼の弱みと思ったのだろうか。

態とらしく手紙を新聞紙の丁度彼の視線が向かう先に置くと、反応を待った。

綾一郎さんは一瞬動きを止めた様に見えたが、気にせず新聞を読み続けているとも見える。

「郵便受けに残っていましたよ。」

取りこぼしなんて、老化が進んだんじゃないんですか？」

「そうかも知れねえな。」

それより、相変わらず直帰たあ、何とも面白みに欠けるじゃねえかよ。」

相変わらずの減らず口だが、僕の反応を面白がる彼が今日に限っては新聞から尚も顔を上げないでいる。

「都会は怖いものばかりなんで、急いで帰って来ました。」

我ながら上手い返しをしたと、少しだけ得意になる。

「そりゃなによりだ。」

そんな僕を一瞥して静かに口の端を上げる態度が、あからさまに馬鹿にしている気に入らないが、今日は手紙というイニシアティブを持っているという強みがある。

「珍しいですね、手紙なんて。」

しかも相手は女性みたいじゃないですか。」

「そうだな、槍の集中豪雨でも来るか？」

緩慢な手付きで封筒を取り上げると、作務衣のポケットに無理矢理押し込む。

「こつもあからさまに動揺してくれると心も踊る。」

「どなたなんですか？」

昔の教え子とか、まさか別れた奥さんとかじゃ……」

「戸籍は綺麗なまんまだよ。」

「こいつは、この家の本来の持ち主からだ。」

言われて、確かに何度かそういう話があったと思い返す。

大家を公言しているが、持ち主は別にいて下宿屋の管理をその人から任されているだけだという。

長らく店子も入れず放置していた事に業を煮やして、ついに何か行つて来たのかと、常識に当て嵌めれば当然の成り行きだった。

確かにそれじゃ手紙だつて見たくもないだろうと納得する反面、自分の絵図面と違う展開に人知れず嘆息した。

流石にこれを掘り返すのは酷だと思い、話題を変えるべく口を開こうとした所で、ふと綾一郎さんの傍らに見慣れないものがあるのに気付いた。

紫色の風呂敷包み。

弁当箱より二回り位大きいそれは、しっかりと口を縛られ中を見る事は出来ない。

「綾一郎さん、それって……」

「ああ、商売道具だ。」

「たまにや手入れしてやらんな。」

そういうと、不意に風呂敷包みに手をかけ、新聞紙の上にそれを乗せた。

衣擦れの小気味の良い音を響かせ包みが解かれて行く。

中には朱塗りの硯箱が現れ、テーブルの片隅に丁寧に置かれた。

蓋が開かれると、年季を節々に感じさせる硯や文鎮などが見える

が、筆一つ取つても、素人目には改めて手入れをする余地なんかない程に美しく見える。

「別に面白いもんは入っちゃいねえよ。」

視線に気付いたのか、綾一郎さんが声をかけた。

からかう様ないつもの悪戯っぽい笑ではなく、力なく目を細める。なんだか、その姿には生気がどこかに散ってしまったている、そんな風に見えてしまい、思わず口籠ってしまった。

「え……あ、あの……あ、そうだ。」

良かったら書道を教えて下さいよ。

月謝は払えませんが、格好だけで良いんで。」

「なんだあ、格好だけって？」

まあ良いさ、じゃあこつちに座れ。

筆の持ち方位はサービスで教えてやる。」

促され、彼の隣に座る。

どうしたものかも分からず、取り敢えず背筋を伸ばして正座していると、背後から音もなく手が伸びて来ると、硯箱から太筆を取り出し僕の手にとつと持たせた。

「ほら、指の力を抜け。」

筆の上を人差し指と中指で押さえて、下を親指で支える。

筆は半紙と垂直より気持ち傾ける。」

次々と指が自分の意志に反して動かさる様子を、心の準備も儘ならないまま目で追う。その間に背後の人形師は硯に墨汁を流し、真っ白い半紙を新聞の上に敷く。

「ぼ、墨汁ですか？」

「書道って言ったら墨を擦ったりするんじゃない……」

「馬鹿か。」

「とうしろう相手に勿体ねえ真似出来るか。」

「箱の中の墨は純松煙だぞ。」

「家賃一月分でも半分も買えやしねえ。」

それがどれ程の物か見当も付かないが、勿体無いと万単位という事だけで、十分の僕の口は硬く結ばれた。

「墨汁は穂の先から少し上位まで付ける。」

「軽くて良い。」

そのまま脇を開いて、肘や手首がテーブルに付かないように……
そつだ、そのまま左端に下ろせ。

「気を抜かず、ゆっくりと右に走らせ……ここでしっかり止める。」

半紙には横棒が一本、やや歪んでいるが出来上がり、僕は何だか分からないまま、取り敢えず緊張を解いて深く息を吐いた。

「そいつが基本の一字だ。」

「ただの横線だと思ふなよ。」

「そのガタガタの線が真つ直ぐ引けるようになりゃ、板書の写しだつて額縁に飾れる位にゃ綺麗に書けるつてもんよ。」

「変哲のない、幅も疎らな横線と見詰め、とてもじゃないがこの先の学生生活を照らす光明には見えないと、背後の即席師匠に気付かれない様に苦笑いを浮かばえた。」

「しかし、お前も酔狂だな。」

「こんな辛気臭いものに興味を持つなんざ、やっぱり健全な若者と」

は言えん発想だぞ。」 「ちょっとした気の迷いです。

そういう貴方は、その健全な若さをどうして書道に注ぎ込んだん
……」

問い掛けを言い切る間もなく、いきなり首筋に吐息がかかり、思
わずその場で飛び上がった。

辛うじて声だけは出さずに済んだものの、生温い滞留した空気が
いつまでも絡み付いてはなれない、そんな妙な感覚が尾を引く。

「なつ、何を遊んでいるんですか？」

「あ？」

何となくだ、意味なんざねえや。

まあ、強いて言えば、お前が生意気だからか。」

ここまで明確な理由があるのに、何となくもないだろうと、内心
毒吐くが、そんな子供の様な振る舞いがやけにツボに入り、そっち
の興味の方が強かった。

「俺が書をやる切欠な。

何の事はねえ、ただの足がかりだったんだだよ。」

唐突に話題が戻った。

余りの不意打ちにまた何かの冗談に繋がるのかと身構えたが、さ
っきの悪戯で立ち上がった僕に、俯いて座る彼の表情は読み取れな
い。

「学生時分の話だ。

俺も元々はこの下宿屋に厄介になっていた身でな。

当時はこの辺も人が少なく、貧乏農家の倅でも飯付きで居座れる
位の家賃で済んだ。

大家は奥さんと娘の二人きりで、泥棒避けの男手も期待しての安さだったんだろうがな。

他にも何人かが間借りしていて、それなりに喧しかったよ。今じゃ考えられんな。」

所在なさげに棒立ちしていると、片手で座るようにと促され、大人しくそれに従った。

「その中に、一人いけ好かねえ奴がいた。ヒョロつとした優男で物静か。

馬鹿騒ぎする俺達を尻目に、まるで隠者の如く他人との接触を避けて暮らしていた。

聞けば大変ご高名な書家のご子息って言うじゃねえか。

そして何より気に食わなかったのは、そのヒョロ男にお嬢さんが懐いていたって事だ。野郎の巣窟に年頃の女が一人きりだ。

そりゃあ、店子一同の怒りの視線を一身に浴びていたよ。」

自分も含めてな、とばかりに息を漏らす彼は、当時を回顧しどこか自重している様にも見える。

そんな遠回しでなかなか本題に入らない状況に半ば苛立ちを感じたが、綾一郎さんの雰囲気気圧され、そのまま黙って聞くしかなかった。

きつと怪談を話す時もキャラ付けを念密にする性質なんだろう。

「そうこうしている内に、お嬢はそいつから書道を習い始めた。

同じ部屋で二人になんて事になりゃ、もうお終いだ。

それだきゃあ阻止しろと我も我もと気がつくのと店子全員が弟子入りした。

が、俺達の誤算は、ヒョロ男が恐ろしい程に厳格な師匠だったって事だ。

元々真剣に習うつもりもない俺達は、憎むべき相手に筆の持ち方

から座り方の果てまで駄目出しされて、あっという間に辞めてしまった。

全てを逃げ遅れた俺に委ねて、な。」

「調子に乗って深入りした挙句、逃げ時を逸するなんて、魔の抜けた綾一郎さんらしい。」

言ってくれるじゃねえか、と口元を緩める彼だが、目が余り笑っていないのは自分もそう思っているからだろうか。

「そのお嬢が、奥さんが亡くなった今、ここの持ち主って訳だ。謂わば兄弟弟子って所か。」

そんなこんなで、見事怨敵の喉元深く食らい付き、更にはその他大勢のライバル共も争いなく蹴落とせたって思わぬ副賞まで勝ち取った。

だがな、そういうしている内に、そんなもんでも良くなる位書道にのめり込んじゃってな。

そこで漸く分かった。」

「何がです？」

「俺はな、お嬢の事を、言う程好きじゃあなかったんだ。」

笑い所だ、とばかり目配せをする彼の姿で確信した
やっぱり、ただの冗談の一つだった。

僕の顔を眺め気が済んだとばかりにテーブル上の道具を片付け始める綾一郎さんの様子を、口を半開きにしたまま暫く見る事になる。

「……いやいや、全然笑えませんかよ。」

「じゃあ、笑えないついでにもう一つ。」

風呂敷の口を縛り、腰を上げる彼の背中が、思い出したとばかり

再び語りかけた。

「ここは来月で引き払う。

お前も別のアパートを探すんだな。」

真つ白になった頭が、次に言葉を捻り出すまでの間に、綾一郎さんは居間から姿を消していた。

僕はその場に、今度こそ助けの手もなく指先の果てまで縛り付けられた。

―其ノ伍―（前書き）

第五回目をお送りします。今回はちょっと箸休め程度の長さです。次回辺りからグツと話を進められたらと思います。尺に偏りがあって申し訳ないです…

一其ノ伍一

学食の飯は可もなく不可もなく。

値段が安く量が多いのが売りだが、他の大学ではレストラン顔負けのメニューを出す所もあるとか。

尤も、そんな小洒落たランチを切望する様な学生は、もっと偏差値の高い所に行っているだろうけど。

三百五十円のコロッケ定食でも十分美味く、腹も膨れる。

それが食堂の隅で一人でいようが、隣の席の連中が馬鹿騒ぎしていようが変わらない。

あの日、突然告げられた退去宣告の後も別段日々の生活に変化はない。

最初こそ勝手に引越し先を探せと言われたが、綾一郎さんの生徒に不動産屋がいるとかで、特別に在学期間中だけ格安で広い物件を用意してくれるそうだ。

流石に食事付きで二部屋分とかはあり得ないだろうが、聞いている限りでは破格の条件だ。

毎日大学に行き、早々の帰宅を鼻で笑われ、他愛のない話をしながら夜になり、自室に戻って寝る。

何一つ変わらない。

そもそも変わる理由がない。

ただ、今後の事を少しだけ考える。

何となくだが、部活にでも入ろうかと思う。

中途半端な期間だから、いっそ二年の新学期まで待とうか。

隣の喧騒の中に自分がいるのが余り想像が出来ないが、混ざってしまえば案外馴染むものかも知れない。

寂しがっているのだろうか。

自分の事なのに、どうも実感が無いのが困る。

なまじ話し相手がいたからか。

そんな事を綾一郎さんに言うものなら、またあの耳に残る笑い声を上げて馬鹿にするだろう。

ボケツと考え事をしていると、ドンツ、とテーブルに衝撃が走った。

隣の集団にまた一人加わって、そいつが派手に座り込んだらしい。そう言えば、当の綾一郎さんは今後どうするんだろうか。

下宿を畳むらしいが、あの年になって行く宛てがあるのか。やっぱり手紙の女性の所に転がり込むんだろう。

向こうも身寄りがないとか言う年齢じゃないだろうに、迷惑をかけやしないか。

考えてみれば、彼を孤独な男やもめだと思い込んでいた僕が安易だった訳だ。

職場では先生と慕う大勢の人に囲まれ、プライベートでも何十年と交流している間柄の友人もいる。

単に悠々自適の隠居生活を謳歌していただけなんて、少しでも哀れに思った僕の浅はかさに、顔から火が出そうになる。

僕の透けて見えそうな魂胆に気付いて、毎日笑っていたのかも知れないな。

それにしても、また一層隣が騒がしい。

毎日そんなに楽しい事があるのか。

綾一郎さんも、今後もそんな笑いの中にいて、自身もあの変な笑い声を上げて日々を楽しんで行くのだろう。

「……………あれ？」

そう言えば……………

あの咳を押し殺した笑い声。

最後に聞いたのは、いつだったろうか。

今日のコロシケは少し揚げ過ぎな感じがして、初めて一つ残した。

―其ノ陸―（前書き）

第六回をお送りします。こここの場面はちよつと長くなるのと、思いの外難産で何時書き上がるのか分からないため、一旦区切ります。やっところここまで来た…あと2回です。

「其ノ陸」

荷物は宅配便で済んだ。

元々家具も食器も、下宿暮らしでは買い揃える必要もなく、ましてや半年の生活ならそんなものだろう。

それだけに、ここには何の未練もない。

明日の朝もすんなりと出て行ける筈だ。

郷里の両親にも、念のため連絡を入れた。

初めて下宿を出る話をした時は、僕が何か問題を起こしたのではないかと心配し、綾一郎さんから直接電話口で説明を受けるまで原因が僕にあると信じて疑わなかったのは、どうにも不満が残る。

今日は一度も綾一郎さんと顔を合わせていない。

大学の講義もサボり、一日中引越しの荷造りをしてきたから……という建前の元、何となく一人になりたかった。

部屋の隅に畳んだ布団に背を預け、開いた本の同じページをずっと眺めている。

「吟介。

起きてるか？」

襖の向こうから、声が掛かった。

最悪の間でやって来る彼を疎ましく感じ、そつと息を吐く。

「……いえ、大丈夫です。

どうぞ。」

ここで沈黙を決め込まなかったのは、大家に対する最低限の礼儀などではなく、単に度胸がなかったただけだ。

程無く襖が開かれ、いつもの作務衣姿の綾一郎さんが顔を覗かせ

た。

頭の白髪が心なしか増えていると思ったが、蛍光灯の光の具合だろう。

綾一郎さんは僕の姿を見止めると、指先で頭を二度三度搔いて、失礼するよ、と目の前に腰を下ろした。

「挨拶なら、明日の朝改めてこっちからするつもりだったのに。」

態と検のある言い方をした。

何となく、意味もなく。

彼はそれを幼稚な反抗と受け取ったのか、鼻を鳴らして細めた目を僕に向けた。

それで更に眉間の皺を寄せる僕は、やっぱり幼稚なのだろうか。

「そう邪険にすんな。

どうした？」

出て行く直前になって、一方的に追い出す俺に腹を立てたか？」

「今まで破格の条件で住まわせて貰って、その上引越し先の手配までしてくれたんですから、寧ろ感謝していますよ。」

確かに唐突過ぎて受け止め切れない期間がありましたけど。」

談話の途中で、いきなり来月出て行けと言われれば、どんなに落ち着き払った人間でも冷静にはいられないのは当たり前だ。

だがそれよりも、気になる事や言いたい事は別にある。

「あの手紙が原因ですか？」

この一月の間、言えずにいた疑問。

踏み込んではいけない部分だと、退去宣告の後も努めて日常を続けて、それでも遂には会えば口にしてしまいそうになる位に膨れ上

がった、不安とも好奇心とも付かない気持ちの悪い衝動。
僕は飲み込みきれず、ここぞとばかりに吐き出した。

「いいや。」

原因つてのを敢えていうなら、もつと前だ。
そうさな、もう半年位になるか、なあ吟介。」

綾一郎さんの視線が唐突に落ちる。
半年前。

それは、言うまでもなく僕がここに来た頃の事だ。
僕は自分の名前を出された驚きと共に、投げた問い掛けを上塗り
して放り返された事への気持ちの悪さが残った。

沈黙の間隙を、時折吐息の音が突き抜ける。

その度に自分の体が貫かれる気がして、全身の筋肉が強張ったま
ま解けないでいる。

「昔話をしただろう。」

そうだ、お前に筆を教えた時だ。
半年前つて言いながら、今度は一月前かと、また怒られそうだが
な。

ちいと我慢して聞いてくれや。」

次に言葉が戻った時には、既に綾一郎さんの視線は僕に戻ってい
た。

いつもの様に。

「俺の書の師匠、いけ好かねえヒョロ男だ。」

あいつは、びっくりする位に俺とは真逆の人間だった。

育ちの良さと、それを鼻に掛けず孤高を美德にする物腰。

人の中に身を置くのが苦手で、その癖近寄られるのは嫌いじゃな

いなんて面倒臭い奴でな。

完璧主義だが、価値を感じない物には無頓着で、それが意外と多いもんだから、世間知らずが甚だしい奴だった。

我が我がと何にでも頭を突っ込んで、興味がなくてもその輪の中に入らずには気が済まない俺とは、今こうやって思い返してもやっぱりかけ離れているな。」

何か別の事を話すのに、あれこれ前置きを捏ねられているのは明白だ。

落語家の枕を聞いている様な、けどどうにも歯切れの悪い、お世辞にも出来が良い物とは思えなかった。

「最初はどうでも良い、その場の勢いで始めた書道だ。

お嬢の事もすっかり醒めた。

あいつも俺の思惑をそれなりに察していただろう。

それでも次第に本気で取り込んで行った。」

「それは聞きました。

書道その物にのめり込んだんでしょう?」

散々引き伸ばして置いて、一月前の焼き直しなんて、完全に時間の無駄でしかない。

今まであんなに他愛のない話を繰り返したのに、今日はそれが我慢ならないでいる。

また煙に巻かれて終わりなのか、最後までこの男とは真剣に何かを話す事なく別れるのだろうか。

「半分はそうだ、それで合っている。

だが、それだけじゃあ足りない。

理由としては不十分だ。」

彼は僕を見据え、淡々と口を開く。

まるで僕の言葉を予め予測しているかの様に、次第に表情も消え始める。

いつも僕をからかう時に深くなる目元の皺も、今は力のない双眸を強調するかの様な陰を作るだけだ。

「もう半分は……いや、こんな言い方は適切じゃあねえな。

あいつが教えるもんが、生花だろうが舞踊だろうが、同じ様に覚えただろうよ。」

そこまで言うと、ゆっくりと、そして鋭い音で一度だけ大きく息を吐いた。

「俺の興味は、ただ一つ。

あいつの存在その物だった。」

―其ノ漆―（前書き）

第七回をお送りします。随分と細切れにしてしまい、なかなか話が進まないのですが、今回も一旦区切ります。予定変更であと二回で終了予定です。多分もう増えませんが（苦笑）

―其ノ漆―

その言葉の意味を考えた。

文法的には何の間違いもない。

が、この場で、この男が、こんな表情で、口にする事の意味を見出せない。

何かの冗談か。

年寄り世代の比喻表現なのか。

考えても、止めどなく溢れる疑問符に一つの思考が長続きしない。どういう事ですか？

脳の処理がそれだけに全て費やされているかの様に、開いた口はただ弛緩しているだけなのか、全く機能を果たさない。

尚も眼前の男は能面の様な顔を僕に向け、次の言葉を発しようとしているのだけは辛うじて分かった。

親に手を振り上げられた時の、抗えない気持ちと大分似ている。

「ある日突然だ。

最初からじゃなかった。

ヘラヘラしながら適当に筆を振るっていた事を一喝されて、形だけでも真面目に取り組んでいるふりをしながら、コンチクショウと毒づいていたもんだ。

そうやって毎日睨み付けていたらよ、あいつの指が気になった。

節くれだった俺のとは比較にならない程、細く靱やかで真っ白でな。そうしていると、今度は睫毛の長さに注意が行った。

俺もこれ位長けりゃ、もうちょっと女受けが良くなるんだがつて、溜息が出た。

それからは、何かに付けてあいつの容姿が気になって、俺にはねえなと忌々しく思っていた。

立ち居振る舞いから、読んでいる本の題名の果てまで気に停めて、

全く共通点の無いあいつが、気が付くと俺の理想になっていた。憧れていた。

心酔の域にまで達していたのかも知れねえ。」

「それは、尊敬出来る人が出来たって話じゃないですか。

らしくない顔で雰囲気作るから、どう取り合えば良いか分からなかったですよ。」

僕は漸く安堵した。

いつもの冗談の延長だと分かれば、気も落ち着く。

大方、彼にとって余り深入りして欲しくない話題だったんだ。

それを明け透けに問い質した僕も悪い。

それでも、最後に位本当の話をして欲しかったと思うのは、その程度には互いの距離は埋まっていたという自信があったのだろう。

自惚れを露骨に否定されるのは多少胸に響くが、今夜限りで終わる繋がりに今更それ程の影響もない。

馬鹿か、と内心自分を罵倒する。

「話は終わりですか？

言いたくないなら、はっきりそう言ってくれば時間も浪費しなくて……」

「恋、だった。」

少しだけ語気を強め、僕の言葉をかき消した彼は、少しだけ口を結び、それから大きく目を見開いた。

何かを迷い、そして今何かを決断した。

僕の都合など全く無視して。

「俺も最初は、人間性に敬意を持っただけだと思った。

そういうもんだと、無理矢理落とし所を見付けた。

だがおかしいだろ？

あいつの体が俺に触れる度、声を聞く度、身を固くしている自分が確かにいる。

お嬢を親しげに会話をしている様を見ると、やり場のないもどかしさに気が狂いそうになった。

それもお嬢相手じゃなかった。

程無く思い知らされた、認めなくちゃ自分を保てなくなった。

俺は、あいつに恋をした。

異性に抱く、言葉通りの意味で。

俺はあいつに、女に向けるべき視線を送り、この手で触れる事を渴望した。」

恰も予め用意していたかの様に、朗々と紡がれる言葉は、何かの儀式にも思え、眼前の男の表情を殊更無機質な存在に見せる。

今頃になって、初めて彼が真面目に話していると悟った。

半年もの間、常に僕をからかい、巫山戯ていた男から、どうして瞬時にその言葉の真意を読み取れるだろうか。

何より、こんな冗談の様な話を別れの晩に言われて真摯に聴ける訳がない。

「認めて、直後にそれを後悔した。

これは異常だ。

悍ましい感情だ。

精神が擦り減った破綻者の、唾棄すべき劣情……いや、こんなものは情欲に連ねる事すら汚らわしい。

だからな、俺はそれをなかつた事にした。

端っからそんな気持ちを持たなかつたってな。」

「自分で矛盾していると分かっていますか？

だってそうでしょう？

芽生えた感情を恋だと認めないと狂いそうになると言っておきな

がら、なかつた事にするなんて、それじゃ認めた意味がない。
いや、それ以前に男に恋心を持つなんて発想自体……」

この論議は、袋小路に入っている。

感情を認めなければ、衝動を抑えきれなくなり、受け入れれば禁忌を犯した事に苦悩する。

なら、どうすればいいのか。

そこまで考えが及んで、そのまま口を閉じた。

恐らくそこに至るまで、彼はあらゆる可能性を考えたのだろう。

友情、憧憬、語られた人物像からすると孤独でいる事への憐憫も候補にあつたろう。

それらを潰して最後に残ったものが、人として破綻した感情だったとしたら、僕も彼の選択を頭ごなしに否定出来ない。

「……破綻してたんだよ。

リセットするしかねえじゃねえか。」

僕の思考を見透かしたかの様に、ぽつりと言葉が返される。

少しだけ、僕の知っている綾一郎さんの感情が乗っている気がしたが、その表情に全く変化は見られない。

「どんなに醜く汚らしいもんも、知られなきゃそいつには存在しないのも一緒だ。

だから、決して気持ちを悟られねえように努めた。

いきなり距離を置けば何かあつたかと不信がられる。

いつも通りに書道を学び、冗談を言ったり、適当に小難しい話を茶化したり。

そうしながら、まるで薄氷の上を渡る様に、僅かずつ距離を広げて、自然に関わりを絶てりゃ重畳。

駄目でもどうせ四年で下宿ともおさらば、その間に胸を抉られて

も罰だと思えば気も紛れる。

となると、事はあいつにだけって訳にやいかねえ。

お嬢や大家、他の下宿人達にも毛程の素振りを見せちゃならねえ。何がどう転んでバレルかも知れん。

なら、近所の人や学校の級友にも気が抜けねえ。

気が付くと、自分に関わる全ての人間に猜疑心を抱き、一刻足りとも休まらねえ生活が続いた。」

深く、深く息を吸い、男はゆっくりと溜息を吐いた。

其の捌（前書き）

第八回をお送りします。

伸ばしに引き伸ばしたこの場面も、今回で一括りです。

次回、最終回です。

其の捌

「四年もそんな馬鹿やっているとな。

その後もあちこちガタが来る。

下宿を出て、就職のために別に移り住んでも落ち着かねえんだ。

誰かが俺を監視している様な錯覚が、いつまでも付き纏って離れねえ。

人と関わると、常にあいつとの接点を疑ってしまつてな。

気が付くと、人間そのものが怖くなつて一人の時間が増えて行つた。

そんな奴はもう出世なんざ出来ねえ。

程なく居場所も無くなつて仕事も辞めて、あとはどうでも良い仕事で細々と最低限食つて行ける金を稼いで、他は埒に引き籠る日々だった。

そうなるとな、顔の表情が変わらねえんだ。

喜怒哀楽とは無縁の生活で、必要のねえもんはいつの間にか忘れちまつ。

それに気付いた時、初めて一生ものの罰を受けたと悟つた。

自分の気持ちを偽つたバチが当たつちまつた……

だから、いつその事こいつを生きる意味にしちまおうと思つた。

馬鹿らしい話だが、この罰を抱えても尚生き続けられるのか、それだけを目的にするのも悪くないと、そう……」

そうか。

眼前に腰を下ろす彼こそが、本来の姿だ。

僕の知らない、得体の知れない男。

こんなにも衝撃的な告白をされても尚、冷静に対峙していられるのは、その実何一つとして耳に入っていないからだ。

今初めて出会つた人間からの言葉を取り合う程、僕は寛大でも酔

狂でもない。

そういう事だ。

僕が知る、あの綾一郎さんは、もう何処かに行ってしまった。あと一晩位、どうして騙してくれなかったのか。

舌打ちをする行為すら煩わしく思えて、口を籠らせてしまう。

「……それで、どうして僕にそんな話をするんですか？

僕はただ、ここを畳む理由を……いや、それもただの世間話の様な、どうでも良い事なんです。

いつもの冗談だろうが、本当だろうが、僕には何の関係もない。

明日は早いので、そろそろ出て行ってくれますか？」

自分でも冷めた物言いに驚いている。

だが、もう男に対して感情を乗せた言葉の一切を、僕の口から投げ掛ける気にはなれなかった。

僕は、彼に何を求めていたのだろうか。

人と関わる事が苦手で、いつも頼りなくて、時折見せる陰が尤もらしくて、誰かの支えが必要だと思わせる、そんな人に求めるものなんて始めからなかったのか。

今夜はどうも頭が働かない。

男は息苦しそうに浅い呼吸を二度三度した後、少しだけ天を仰いだ。

目に見えない何かを追っている様にも、次の言葉を接ぐタイミングを測っている様にも見える。

まだ続くのか。

最早一切の興味が薄れた今、僕は嘆息を吐いて男が立ち去るのを待つだけだった。

「あの日、葬式に出た。」

確かに最初に出会ったあの日、彼は喪服姿だった。

初対面の相手に、勝手に上がって塩を持って来いなんて、いかにも綾一郎さんらしい。あの時は矢継ぎ早に放たれた言葉に抵抗する手段もなく、只々無難にやり過ごそうと思っていたっけ。

「それまではこことは全く無縁の土地に住んでいて、それでも応お嬢には年賀状のやり取りをされていて連絡先は知られていた。切ってしまいたい縁だったが、どうにも自然に消せるもんじゃなくてな。」

急に電話が来た。

あいつが、急死したとさ。

許された、と思ったさ。

人が死んだのに、俺は素直に喜んだ。

ほっとしたよ。

最後に顔の一つでも見てやろうとさえ思った。

式の後には酒に任せて吐露しちまっても構わんとも考えた。

開放感に満ちていた。」

思えば、最初から世話を焼いた。

自分で出来る癖に、どうでも良い雑用をやらせてはヘラヘラとその様子を見て楽しむ様な人だ。

ずっと独身を貫いているなんて、信じられない位の生活力の無さ。誰かの支えなく生きて行けるのか、いつも疑問に思っていた。

「棺の中のあいつは、白髪だらけでな。

年を取っていたよ。

当たり前っちゃ当たり前だがな。

二十歳そこそこのガキが爺になってたんだ。

流石にそうなっちまうと劣情を催すって事はなかった。

通夜から出棺まで付き添って、その間にあいつの話の色々と聞いた。

なんでも、晩年はこの下宿屋に一人で住んでいたそうだと。実家との確執で勘当されたとかで、それに後ろめたさを感じて誰かと所帯を持つのを拒んでいたとき。

お嬢に家の管理の引継ぎを持ちかけられた時、俺も元いた場所には一切の未練はなかったし、戯れに代わりに住んでやろうと思った。そして、数十年ぶりの古巣に足を運び……お前に出会った。」

どうして僕はここに住むと、綾一郎さんと共に住むと決めたんだらう。

破格の待遇に釣られて、確かにそうだと。

でも何か、決定的な何かがあった筈だ。

それがいつまでも頭に残って、最終的に戻って来た。

「誰かがいれば、失ったものを少しでも取り戻せるなんて、馬鹿な事を考えた。

最初に大きな声を出してみた。

なかなか上手く行った。

調子に乗って、今度は笑ってみるとどうだと。

驚いた。

全然声が出ねえ。

息が詰まって、咳みてえなのしか出なかった。

それでも、何か心が晴れた気になった。

こいつを希望と言うにゃお粗末過ぎるが、そんなもんで十分だ。」

笑い声。

咳を押し殺した様な、あの奇妙な声が耳から離れない。

「精一杯、せめて形だけでも笑顔でいようと、顔面にあらん限り

の力を入れてな。」

どうしてあんなに楽しそうに笑えるのだろう。

どうしてあんなに苦しそうな声を上げるのだろう。

明確な答えが欲しかった訳じゃない。

ただの興味でしかなかったのかも知れない。

傍に寄って確かめたかった。

向こうもそれを許してくれた。

答えが欲しかった訳じゃない。

誰にでも見せるのか、僕にだけ向ける感情なのか。

僕がいる事で、彼は多少なりとも救われたりしないだろうか。

いつか大声を上げて笑う事が、僕にそれを見せてくれる事があるのだろうか。

答えが欲しかった訳じゃない。

答えが欲しかった訳じゃ……

「だが、駄目だった。

どんなに頑張っても、笑えねえ。

気持ちも籠らねえ笑いが、こんなにも苦痛だとは思ってもよらなかった。

気が付いたら止めちまった。

こつやつて、大口開けて、腹に力込めても声が出やしねえ。

クツアツアツって、馬鹿みてえな声になる。

クツアツアツ……アツアツアツ……」

「……お前がそんな風に笑うな！」

眼前の男が、気が付くと笑っていた。

綾一郎さんの笑い声を上げていた。

能面の様な表情で、生気の欠片もない目を向けて、僕を見据えながら笑っていた。

僕の知らない、得体の知れない男が。
何かがこみ上げて来た。
それに従って、あらん限りに叫んだ。

「違うだろ。」

お前じゃないだろ。

俺の知っている綾一郎さんは、そんな事言わない。

そんな不気味な顔を向けない。

そんな死人みたいな目をしない。

お前は誰だ？

何で僕に気持ちの悪い話をする？

僕がどんな反応をすると期待してるんだ？

勝手に悦に浸るな。

僕を出しにするな。

お前なんか僕は知らない。」

沈殿した澱を吐き出すかの様に溢れ出る言葉の数々。

一つ一つが耐え難い程不味くて、喉から口に上がる度に嗚咽を生じる。

最早自分でも意味が分からない。

ただ、体が溜め込むのを拒否している、それだけは理解出来た。

自然と涙が流れる。

感情が昂ぶっている所為か、吐瀉物を戻している時のそれと同じなのか。

悲しみが引き起こすものじゃ、それだけは絶対でない。

酸欠の時の様に、意識が所々遠ざかる。

無表情の男の顔が明滅を繰り返し、それが更に嗚咽を誘う。

「消える。」

不愉快だ。

お前は、消える！」

最後にひり出した汚物がどんな形をしているのかは、涙で視界を遮られた僕には確かめられない。

男は、空気を求めて荒く呼吸をする僕を前にしても、まだ対峙しているのだろうか。

「……悦に浸るな、出しにするな、か……」

急に懐かしい声がした。

懐かしい人の気配がした。

目を拭って見ようとしても、衰弱したいたのか思い通りに腕が上がらない。

呼びかけようとしても、もう声一つ上げられない。

「俺はな、吟介。

人生を余らせた。

全てを捧げる筈の対象が、急に消えちまったんだ。

もう死ぬ事も出来ねえし、生き直そうとしてみても、結局どうにもならなかった。

お前は俺をそのまま否定してくれよ。

決して共感するな。

同情するな。

達者でな。」

前方の空気が揺らいだ。

畳みの軋む音がして、そして遠のく。

足音は、襖が開かれ再び閉じるまでの間、滞る事はなかった。

男は部屋から去った。

漸く広がった視界の先に、綾一郎さんはいなかった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2600w/>

啼かない鳥とはいうけれど

2011年12月26日01時48分発行